



の み が わ

2006年9月25日発行（通算第43号）
 連絡先 〒146-0085 大田区久が原4-19-24
 発行 大坪庄吾方 呑川の会
 呑川の会 e-mail nomigawa@r00.itscom.net
 呑川の会 HP <http://home.m00.itscom.net/nomigawa/>
 高橋会員 HP <http://homepage2.nifty.com/aoiyume/>



呑川親子ウォーキング報告 ——第1回上流域・第2回中流域——

大坪 庄吾

呑川の会の年間計画で決めた呑川親子ウォーキングを、夏休みの7月23日と8月27日の2回、大田区社会教育課と連携した講座として行いました。大田区報等で募集し、申込や資料作成、当日の世話や会場・機材の用意などすべて社会教育課の星野さんが準備して下さいました。

<第1回 7月23日（日）曇り>



参加したのは、子供7人・親5人・呑川の会スタッフ6人でした。子供は1年生から6年生までバラエティーにとんでいました。9時半に緑が丘駅に集合し、白石さんが案内して工大橋から新幹線付近まで歩きました。雪谷文化センターで昼食をとり、午後から「呑川のむかしといま」のテーマで大坪が話し、続いて「呑川のいきもの」について福井さんがパワーポイントを使っ

て話しました。各所で解説をしながら道々橋近くで用意してあった網（魚キラー）を引揚げると何匹かのはぜと思われる魚が入っていました。天候にも恵まれ、さほど熱くない中を楽しく歩くことができました。子供達も、参加した親御さん達も喜んでくれました。

<第2回 8月27日（日）曇り時々晴れ>



盛夏なのに、第2回も涼しい風の中を池上から蒲田まで歩きました。この日の参加者は子供3人、親2人と前回より少なく、初参加の方ばかりです。スタッフは6人、ウォークの案内は福井さんでした。前回に比べ西蒲田あたりから水質が悪くなり、スカムも目だっていました。水質の観察がしっかりできました。この日はトンボが多く、ウスバキトンボ・ナツアカネ・ギンヤンマ・コシアキトンボが見られました。参加した子供は1年生2年生と4年生で生き物にとっても興味をもっていました。低学年の子供に呑川のことをどう話す

か、言葉選びの勉強になりました。稚魚を「ちぎょ」といっただけではわからないからです。専門的な用語を使っても、あとでやさしく言い直す必要があります。

午後は「呑川のむかしといま」を大坪が話し、そのあとから高橋さんがパワーポイントを使って丁寧に撮影した鳥や昆虫について映写しながら話しました。スタッフが見ても素晴らしいものでした。単なる写真だけでなく、セミの羽化など観察のしかたも説明してくれました。

当日参加した2人の親からのアンケートを社会教育課の星野さんがまとめて下さり送ってくれました。子供の目線で教えることは難しいが、とても氣を使った内容で良かったというもの、講座のポイントを絞った方が良いという意見もありました。今後の講座で参考にすべき点を指摘してくれたと思います。

尚、8月のウォーキングに参加した長妻君の作品を紹介します。呑川中流域の様子が手際よくまとめられています。



呑川のチョウ

——「ツマグロヒョウモンの運命」——

高橋 光夫

私は「野の花」が好きで、その宝庫でもある呑川沿いを良く歩きます。



すると今夏、こんな風景に出会いました。ある区間バツサリ野花在整理されています。この場所はスミシガ沢山咲いている場所なので、ビックリして残っているものがないか探しました。うれしいことに島畑橋の近くに数株のスミシガ残っていました。

ああ良かったと見ていると、なにやらヒラヒラ・・・ツマグロヒョウモンです！

チョウの中でもその美しさは評判です。

このチョウは蜜を吸う時はいろんな花を廻りますが、花のない今の時期は食草としてスミシに付くことで有名です。

うれしくて様子を見ていると、なにやら身体を



大きく曲げ、スミシの葉の裏に押しつけています。なんと産卵行動を始めたのです。見ていると、数10回は産んだようです。ところがその卵は小さ過ぎるのでしょうか、私にはその時は確認できませんでした。



とても気になってほぼ2週間後、なんと卵からかえったツマグロヒョウモンの幼虫を見つけました。ああ、ちゃんと幼虫に成長したのだな〜と喜びましたが、その後、姿をサッパリ現しません。そこでスミシの葉の一枚一枚の裏をのぞいてみます。すると脱皮後の2令（黒くなり赤い線が入る）と思われる幼虫がたくさん付いています。これで今後の成長がますます楽しみになりました。



ほかにたくさんスミシが生えていれば、そこに移って葉の陰に隠れることが出来ますが、もうこの付近は人間の変な美意識ですっかり刈られ、なにも無いのです。

食べる葉を失ったツマグロヒョウモンの幼虫はついに1匹がほかへ探しに出かけ始めました。いったいどこへ行くのでしょうか・・・

さらに2週間ほど経ち、9月の初めです。ツマグロヒョウモンの幼虫は、スミシの葉を元気に勢いよく食べ、すっかり大きくなりました。もうほとんど4令（終令）と思われます。このスミシの葉はすっかり食べられて、ほとんどが主脈と茎だけになり、幼虫の姿は葉の裏に隠れることが出来ません。

この状態の幼虫はまったく無防備で、見つけやすくて、他の昆虫や鳥たちにすぐ捕食されてしまいます。





さまよひ始めた幼虫は、呑川沿いの道路を歩き始めたり、なんと呑川の護岸を昇るのさえいました。護岸の先はコンクリートで固められた川で、食草はありません。



やりきれない思いで幼虫の姿を追っていると、1台の車がサッと走り抜けました。あっという間につぶされた幼虫は、内蔵を出し、スミシの葉をたくさん食べたミドリ色の内容物を外にさらしました。

ほかの幼虫たちも鳥たちがねらっているでしょう。いったいどのくらいの幼虫がサナギになるまで生き延び、美しいツマグロヒョウモンの蝶の姿に成長できるでしょう。

「野の花」を雑草としてすぐに刈り取る人間たちは、こういう光景を知っているのでしょうか・・・

呑川ユスリカ事情

福井 甫

先日、大田区の生活衛生課から17年度の呑川のユスリカに関する調査結果を受領しました。特記事項は次の通りです。

- ① 17年度から区では新たに河床調査を実施したこと。
これはコドラートという25㍍四方の金属枠の中の藻を採取し、藻の重量およびその中のユスリカ幼虫・さなぎ個数を島畑橋、雪の橋、長栄橋の水際点と中流点の6箇所で行ったものです。その結果は次表の通りです。(採取日は17年4月18日)

採取場所	藻採取量 A (g)	幼虫生息数 B (匹)	蛹生息数 (匹)	幼虫生息数 / 藻 B / A (匹/g)
島畑橋中流点	965.43	934	0	0.98
島畑橋水際点	152.83	2,177	370	14.2
雪の橋中流点	48.04	1,223	111	25.5
雪の橋水際点	41.98	1,015	65	24.2
長栄橋中流点	17.69	542	17	30.6
長栄橋水際点	6.0	101	5	16.8

- ② 最近の特徴として道々橋付近での未改修区間には新種のユスリカ(ウスイロユスリカとか)が見られ、それによる被害の相談・訴えが多くなっていること。



(写真は、道々橋付近のユスリカ、上流のフタスジツヤユスリカとは明らかに違う)

- ③ 17年度から河床清掃を年4回に1回増やしたこと。河床清掃の回数増は上記①にも見られるとおり藻の多いところはユスリカも多くユスリカ対策としては有効であるが、一方藻はカルガモ等のえさになっており、その意味で最近の呑川でのカルガモ減の一因かも知れない。

- ④ ユスリカ発生による苦情・相談件数は、平成14年度の1件から15年度6件、16年度11件、17年度11件と増えている。

ユスリカに対する抜本的対策は、呑川の水の源である落合水再生センターの処理水の窒素・リンの濃度を多摩川並みに下げ(流水中の全窒素の濃度は、多摩川大橋 6.09 mg/ℓに対し島畑橋 12.02 mg/ℓ、全リンの濃度は、多摩川大橋 0.351 mg/ℓに対し島畑橋 1.47 mg/ℓと著しく高い。平成16年度版「大田区の環境調査報告書」から)、藻の発生を抑えることと、マルタ・コイ等ユスリカを捕食する魚が工大橋まで生育できる環境に整備することであろう。生物の食物連鎖の利用によるユスリカの自然淘汰が望ましい。そのためにもまず道々橋下流側にある落差は解消し、魚が遡上できるように改修したいが、それまでは河床清掃も止むをえないだろうか。

それとともに呑川のユスリカ事情が経年的に良くなっているのか、悪くなっているのか、わかる指標も必要だろう。その指標として現在実施しているハエ取り紙による調査が活用できるのなら、調査方法もそのような視点で見直すことも必要かもしれない。

きれいとも言えず、快くもなく、
生きものも少ない川 呑川
——— 呑川アンケート結果から

福井 甫

ロンドン大学に留学中の大軒さんが、6月末から7月末にかけ一時帰国し、呑川の越流水を調査された中で 住民にアンケート調査されました。アンケートは大軒さん自身4回され、うち2回 私も蒲田・本門寺前の2箇所でも協力しました。大軒さんが回答者100人のデータを送って下さったので、その感想を記してみます。

(写真は霊山橋から下流方面を望む)

呑川の印象は全地区を通してみると「きれいさ」、「快さ」、「生きものの豊かさ」でマイナスの評価になっている。つまりきれいとはいえない、快いとはいえない、生きものも豊かとはいえないという評価である。その中では池上地区は「快さ」、「親しみやすさ」のプラスの評価が他地区より一番強く、生きものの豊かさも他地区が少ないと評価しているのに多いと評価している。実際本門寺前の霊山橋から下流をみれば右岸に大きなケヤキが川に張出し、両岸はアイビーに被われ左岸は本門寺・照栄院・養源寺等の樹木が豊かなことから当然かもしれない。



その他 気付いた点は呑川の水が下水の再生水であること、下水道の処理方式が合流式であること。従って呑川の悪臭・スカム・白濁が合流式による下水の越流水によることを知らない人が多かったことである。そして呑川の改善すべき項目は悪臭・ゴミ・水質・害虫（コスリカ）の順番だった。

なお大雑把な政策順位として教育・福祉・経済・環境・防衛の5項目から順番をつけてもらったら、教育・福祉・環境は大差なく上位だが、防衛は5番目に選んだ人が多かった。

大軒さんのアンケートは質問項目が適切である上、回答しやすいように工夫されている。呑川の会としても各地区ごとに手分けして実施したら面白い結果がでるかもしれない。ただ質問者が若い女性だから協力してくれたので、オジサン・ジイサンだったら協力してくれるか自信はない。

それはともかく呑川が「きれい」、「快い」、「生きものが豊か」と全流域で評価されるようになるのはいつのことだろうか。

新呑川HPの見方など

工藤 英明



最近では、ほとんどの情報が、いわゆるホームページに掲載され、PCにより全世界の人々に公開されています。PCなる機械と電話回線などの通信インフラが整っていれば、閲覧することができます。各国の政府・行政機関から近くのスーパーやちょっとした商店・工務店・美容院までHPを持って自分たちの情報を発信し、いわゆる「情報化社会」が実現しています。全世界のHPの数は、数十億件と言われております。最近では、簡易HPとも言うべき「ブログ」（ウェブログ）といわれるものも多くネット上に存在し、これらを含めると数え切れないほどのHPが地球上を覆っている感じです。

われわれ呑川の会のHPもPCで検索すればすぐに見つかります。それは、旧呑川のHPです。これは、NIFTYのサーバーに保管されていますが、一昨年末以降更新されていません。旧呑川HPから新呑川HPへの引越は、本年7月に実施されました。そこで、以下に新呑川HPの見方などについて、お知らせいたします。新HPのURLは次のとおりです。PCお持ちの方は、アドレス欄に以下の文字を入力して「GO」をクリックしていただければ、ご覧いただけます。

<http://home.m00.itscom.net/nomigawa/>

前述のとおり旧HPは一昨年以降更新されていませんでした。そこで、昨年中に発行された呑川の会報「のみがわ」をパソコンでも閲覧できるようにとの思いで、新呑川の会HPを立ち上げました次第です。このHPは、ITSCOMのサーバーに保管されています。勿論、旧HPの資産内容は、そっくり引き継いでおりますので、新HPでも、閲覧できます。変わったところは、新HPでは、2005年以降の「のみがわ」をPDFに変換し掲載していることです。これらページを閲覧するには、アドビー社の「アドビーリーダー」というソフトが必要です。このソフトの入手方法は、アドビー社のHPからダウンロードします。既に、自分のPCにインストール済みの方も多いと思いますが、もし、未入手の方がいらっしゃいましたら、ダウンロードしていただきたいと思います。アドビー社 Adobe Reader ダウンロード用のURLは、以下のとおりです。

<http://www.adobe.com/jp/products/acrobat/readstep2.html>

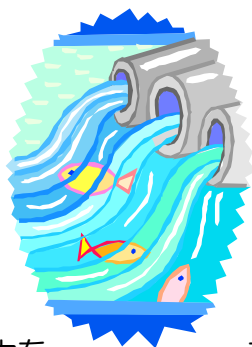
PDFは、非常に優れたファイル形式で、拡大・縮小が簡単にでき、カラー写真を自由に貼り付けたりその写真を別途コピーして自分のPCに取り込み加工したりできます。写真も鮮明に拡大してご覧いただけますので、実際の紙の白黒印刷の「のみがわ」を読む・見るより楽しむことができると言っても過言ではありません。特に、前号「のみがわ」の高橋さんのカワセミの写真や、本号「のみがわ」のこれも高橋さんの「呑川のチョウ」の写真などはその典型です。

都市における雨水対策と水循環の最近の動向

国土交通省都市・地域整備局下水道流域下水道計画調整官
石橋良啓

白石琇朗

呑川の会・折戸氏より、川崎の神奈川県立図書館で「下水道協会誌」の6月号をみて、「自分の言いたいことが要領よくまとめられている記事がありましたので参考までに」とコピーを送って頂きましたので、概要をお知らせします。



力を

近年集中豪雨が頻発し、時間雨量が100mmを超えるような雨も珍しくない。一方、都市化の進展によって道路や宅地等の開発が進み雨水の浸透域が減少し、従来は地下に浸透し時間をかけて河川等へ流出していた雨水が、地下へ浸透することなく地表面を流れて下水道や河川に流れ込み、流出時間が短くなるとともに、流出量が増大することとなる。その一方で地下への浸透の阻害は、平常時の河川流量の減少や湧水の枯渇などを招くことにも繋がっている。合流式下水道は構造上降雨時には雨水と汚水が混合して流れ、遮集管きよの能

超えた分は未処理のまま雨水吐きから公共用水域に放流されることになる。このため下水中に含まれる汚濁負荷や病原性微生物などによって、水域における生態系への影響や利水者に対する衛生学的安全性にかかわる影響が懸念される。このような状況を早期に改善すべく、下水道法施行令の改正によって、平成16年度から原則10年以内にその改善が義務づけられたところである。

また公共用水域の水質汚濁の原因の一つとなっている宅地や道路などの市街地の面源（ノンポイント）から流出する汚濁負荷を削減するためには、初期雨水の対策が重要である。今後、合流改善やノンポイント汚濁対策は、浸水対策とあわせて雨水対策の一環として早期改善に向けた取り組みを積極的に進めていく必要がある。

下水道は、都市の汚水や雨水を速やかに排除するために、地中に下水道管を設置あるいは既設の水路を暗渠化するなど、その整備が進められ都市の発展に大きく寄与してきた。しかし自然の流水系から離れた人口のバイパス水路を形成することとなり、地域が本来有する地形や自然条件を踏まえた水の流れに影響を与えるとともに、暗渠化による水面の喪失は、結果として都市の空間から潤いや安らぎを失わせることになった。

東京では、年間降水量約1400mmのうち、約600mmが直接河川や東京湾に流出する一方で、それを上回る約700mmの水を利根川水系から確保するなど、年間の水使用量の約80%を他水域に依存しているというデータもあり、地域内での水利用の自立性の低下が顕著となっている。

今後の雨水対策としては、速やかに排除するという従来の固定的な考えから、むしろ可能な限り貯留や地下浸透によって雨水の流出を抑制するという考え方に転換していく必要性があり、そのためには公共による調整池など貯留浸透施設の整備を積極的に推進するほか、より面的な対策として、各戸貯留や浸透枳の設置を促進することが必要であり、これによって降雨時の流出が抑制されるとともに、湧水の復活や平常時の河川流量の確保にも繋がることとなる。

都市における水利用の自立性の向上を図っていくためには、貯留した雨水を簡易な水源にするなど、雨水貯留水の多角的な利用を進めていくことが必要である。一方、下水処理水は水を大量に消費する都市部において、渇水時にあっても安定的に一定の水量の確保が見込むことのできる水資源として位置づけることができる。



現在、雑用水や親水・修景用水として再利用されているのは、全国下水処理水の1.9億m³と年間総量の1.4%にすぎない。トイレの洗浄水などの雑用水への利用のほか、高度処理された再生水によって街の中にせせらぎを取り戻し、潤いのある空間の創出に積極的に活用を図っていく必要がある。これまで暗渠で整備されていた雨水渠をオープン化し、水の流れを地表に取り戻すことも積極的に進めなければならない。

さらに下水道事業で整備した池や水路を河川や緑地とつなげることによって、生態系の保全に寄与するとともに、水路や緑は都市における風の道となり、ヒートアイランド現象の緩和にも寄与するものなる。

下水道はさまざまな資源として、高いポテンシャルを持っている。中でも都市域における水資源として、再生水や雨水の活用はますます期待が高まっており、今後積極的な活用が望まれる。

< 増田直也さんの退会 >

呑川の会の古くからの会員であり、リトルターン・プロジェクト代表でもある増田直也さんが、リトルターン・プロジェクトの多忙とご母堂の介護のため、呑川の会を退会されたいとの申し出がありました。増田さんは呑川の会の設立メンバーの一人でもあり、残念ですが、事情やむをえないと思いますので、これまでの活動・協力に感謝するとともに事情が変更した場合、復帰されることを期待しています。



< 会費納入の依頼 >

「呑川の会」の会費・年2,000円を、なるべく早くお納めいただくよう、お願いいたします。

次の定例会のお知らせ

開催日時： 10月6日（金）18時30分から
会 場： 池上文化センター第二集会室
議 題： 未改修区間の改善策について具体的に検討
呑川の悪臭・スカム等の水質改善について
その他 活動計画の具体化等

< 編集後記 >

前号でカワセミの写真を撮った高橋さんから、「呑川のカワセミは最近数が増え、3羽もしくは2羽でしょうか・・・2羽以上が同時に入った写真を撮りたいのですが。」という、うれしいメールがありました。やはり写真は大事（百聞は一見にしかず）です。

会報の巻頭記載の「呑川の会 e-mail」と「呑川の会HP」が、この号から変更になりましたので、ご注意ください。HPで原版のカラー写真をご堪能ください。（白石 記）